
再会

ペロコ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
再会

【Nコード】
N9939D

【作者名】
ペロコ

【あらすじ】
3ヶ月前に交わした約束が果たされる時が来た…… 邂逅記念日小説です！お久しぶりです 昨年書いた「約束」の続きとなっています。先にそちらをお読み下さい。読まないとなにかさっぱり分らないと思います 記念日小説なので、日付設定はもちろん本日4月1日です では、読んでいただけたら嬉しいです（*^-^*）

（前書き）

あらずじをご覧になってない方のためにもう一度。
読んだ方は、スルーして本編をお楽しみ下さい。

これは昨年書いた「約束」の続きです。必ず先にそっちを読んで
ください。

読まれました？ では、どうぞお楽しみ下さい！

初の対決では、互いの姿を確認できず

時を経て出会ってみれば、それは偽りの姿

何度対峙しても勝敗が決まるわけではなく

ただ無意識に信賴することが増えるだけ

それぞれの戦いに出向いたのは3ヶ月前

そして今日という日に真実の姿で2人は会っ

2人の人間が姿を消して、約3ヶ月が経過した。

その3ヶ月の間、ニュースやワイドショーでは、連日大きな闇組
織の摘発や、逮捕の報道が流れ続けていたが、
その裏で動く2人の影は全く情報が漏れていなかった。

2人がそれぞれの戦いへと向かったのは、厳しい寒さの日だった
が、

現在の季節は小春日と言われる3月末である。

日本で春休みを満喫する人が多い中、2人の交わした約束が果た
される時が来たのだ。

3月31日、朝。

1枚のカードがある家へと届いた。

その家は、日本の誇る名探偵の住む米花町2丁目21番地、工藤邸
である。

一時、姿を消していたその家の息子、工藤新一こそ、2人のうち
の1人だ。

高校生探偵として活躍していた彼は、突然消え、そして突然戻って
きた。

連日ニュースを賑わせる原因の1人でもある。

だが、彼が関わっているということはトップシークレット。それは、彼自身や周りの人を守るためでもある。

そんな逮捕劇が一段落つき、以前のような世の中に戻ったころ、そのカードが届いた。

真っ白な封筒に流れるような文字で「工藤新一様」とだけ書いてある。

差出人は書いておらず、消印やこの家の住所も書かれていないことから、直接投函されたことがすぐに分かる。

それを一目見た新一は、一瞬怪訝な顔をした後ニヤリと笑い、家の中へと入っていった。

家の中に入り、新一は、白い手紙を持ったまま部屋へ行き、机の引き出しから一枚のカードを取り出してリビングへと戻ってきた。

ソファーに座り手紙の封筒を開けつつ

「やつぱり来たか……」

と、1人呟く。

出てきたのは封筒と同じく真っ白のカード。今はもう、目にすることのなくなったもの。

それは、怪盗キッドからの予告状だった。

共同戦線を張ったのは、もう4ヶ月以上も前のことになる。そして3ヶ月前、それぞれの戦いへと出向いたのだ。

新一は先陣を切って指示を出し、キッドは裏から手を回し、2つの大きな組織を壊滅へと導いた。

真っ白な戦闘服に包まれたあらゆる謎の持ち主と交わした、たった1つの約束。その招待状のようだ。

文面は、昔のように暗号で書かれているのではなく、至ってシンプルだった。封筒に書かれていたのと同様に、文章は手書きで流れるように書いてある。

『時は来たり
再会はウソの日に』

「オイ、今晚じゃねーか」

苦笑しつつも、今夜の予定を素早く確認する。

そして、呟いた後、持ってきたカードを読み返す。

『再会は

お互い嘘をついた

あの場所で』

約3ヶ月前、最後に会ったときにもらった最後の予告状だ。

これは場所を指定したものであり、今日届いたのは時間を指定したものだ。

前にもらった時は、いつ再び会えるのか分からなかったから。

場所だけ指定して、あの白い怪盗は姿を消した。

「楽しみだなあ、キッド？」

2人の再会に、これほどふさわしい日はないだろう。

まるで図ったかのような日付の指定に、ちよつと笑いがこみあげる。そして、今は呼ばれることのなくなった名をそつと口に出した。

その声は、新一以外誰もいない工藤邸にかすかに響いた。

あの白い怪盗が姿を消した。専任の警部は、突然いなくなった存在に悲しそうに

「ようやく肩の荷がおりたわ」

と呟いていた。切ないような、嬉しいような複雑な表情で。

あの怪盗を追いかけることに生き甲斐のようなものを感じていた熱血警部は、
今もなお、どこかにいるのではないかと心のどこかで願っている。

たとえ、姿を現さなくても。

そして時は過ぎ、翌4月1日、0時15分。
エイプリルフルである。

ウソをついてもいい日なんていう、どういう由来があるのか分からない日に、2人は衝撃的な顔合わせをした。
互いに偽りの姿で、ウソの名について。

場所は、現在新一が立っている杯戸シティホテル屋上である。

しかし、待ち合わせの時間にはちょっと早く来すぎたようだ。

「あの時はヘリが飛び回って、にぎやかだったな……」

と、しばし回想にふける。

今思うと、あの煩さの方が異常であり、現在の静けさの方が通常なのだ。

風が吹きつけ、さすがに寒さも感じる。

小春日和といっても、こつも夜中ではさすがに寒い。

紺のトレーナーにGパンだけではちよつと薄着すぎたようだ。

ふと、空気が変わった。

今は感じることはない、冷涼で凜と澄んだ気配。

そんな気配の持ち主は1人しか知らない。

待ち人の到着である。

振り返ると、昔のままの白い姿で音もなく降り立った怪盗の姿が。夜空に浮かぶ細い月を背に、白のマントが風に揺れる。

フツ……と新一が笑うと、相手も笑ったようだ。逆光ではあるが、口元がかすかに見える。

怪盗が歩くたびに、コツコツと足音が響く。

その音が、あの時の会話を思い出させた。

ボウズ、ただのガキじゃねえな……

江戸川コナン、探偵さ……

手が届くわけでもなく、遠いと感じるわけでもない。
そんな微妙な距離で、怪盗は立ち止まった。

「わりい今日は花火の持ち合わせがねえんだ」

新一がまず口を開いた。

「そうですか、それは残念です。 お久しぶりですね」
「ああ、そうだな」

実を言うと、姿を見たのは約束を交わした日が最後だった。

「元に戻られたのですね」

「おかげさまで。約束が果たせて嬉しいぜ？」

「ええ、本当に。私達はここで出会ったんですね」

「ああ、あの時はいけすかねえ野郎だと思った」

「ひどいですね」

「批評家なんて抜かすヤツ、気に入るわけねえだろ？」

「私は気になっていましたよ。『子供』の容姿とは裏腹の視線の鋭さと気配があまりにも強烈でしたから」

屋上に1人でいた『子供』の存在。見つけたときは、本当に驚いた。

その切れる頭と、鋭い視線に不謹慎ながらわくわくもした。

何度も顔を合わせるうちに知った本当の姿に、驚いたが納得できた。

「それはオレだって同じだぜ？ オメエの気配は分かるからな」

初めて姿を見た時は、何だコイツはと思った。

だが、こんなに印象に残る犯罪者もいなかった。

一切、血の流れない現場。安心して追いかけることが出来た。

「それは光栄ですね」

ふと間があく。

「もう、その服は着ることはねえんだろ？」

「ええ、これを着るのは今日が最後です。もう怪盗キッドが現れることはないでしょう」

「そうか」

神妙な顔つきで新一が頷く。

あの警部は、きっとこれから待ち続けるだろう。

いくら待っても現れることのない、今、目の前にいる白い怪盗を。

「というわけですので……」

だが、キッドはふわりと笑う。

その微笑は、探偵が浮かべた複雑な表情を全て知った上で一掃するかのごとく、柔らかいもの。

「あ？」

「怪盗キッド最後のマジックショー、とくにご覧あれ」

言い切るやいなや、パチン！ と指を弾く音がした時、新一の視界は白に染まった。

「えっ!？」

ハトだった。それも大量の。

一斉に大量のハトが現れ、夜空へ飛び立っていく。

これも、いつかの時のようだ。ハトにまみれたあの男は一瞬で姿を消していた。

その時のことを思い出し、思わず顔を歪める。

それを目で追い、白い絨毯のようになったハトの群れを見送った後、顔を再び正面へと向けると、そこには、白ではなく黒があった。

派手な若者向けのジャンパーにGパンをはき、フワフワとはねた髪の毛が風に揺れる、

驚くほど新一に似た顔立ちの男が立っていた。

もちろん、その姿が共同戦線を張ったときのものと同じだということに、すぐ気づいた。

きつとこれが素顔なのだろう。

わざわざここで新一に変装してみせる必要はない。

あの時は、本来の自分の姿に変装してみせた怪盗に怒ったが、まさか素顔だとは思わなかった。

「で、言うことは？」

色々思っているものの、新一が短く尋ねる。

「黒羽快斗といえます。黒い羽に、快晴の快で北斗七星の斗。これからよろしくお願いしますね」

笑いながら快斗が答える。

だが、気配は未だ怪盗のまま……。

「昼間もその気配まってる気か？」

「まさか！」

雰囲気ガラリと変わる。

「普段のオレはこんな感じだよ？」

しゃべり方まで変わっている。

「オレは工藤新一。探偵だ」

「うん、知ってる」

一瞬、間が空く。

そして、目の合った2人は同時に吹き出した。
笑い声は次第に大きくなり、2人して涙まで出てくる。

その大きな笑い声は、夜の冷えた空気の中へと消えていった。

初めて会ったのは、ウソの日。
互いに偽りの名を名乗って、警戒して、意識して……。

それから、何度も対峙しては会話を交わした。
互いが認め合う好敵手となり、最大のライバルとなった。

しばらく会わずに再会したのも同じウソの日。
ようやく名乗れた本名に笑いがこみあげた。

これから始まる生活は、どれも本物。

「まさか、名前ウソついてねえだろうな？ 『今日はエイプリルフ
ールだから』とか言って」
「ちょっ！ 信じてよ！」
「冗談だ」
「あのねえ……」

（後書き）

【邂逅記念日ー！ー】

お久しぶりです。ペロコです。本日付けで復活です（嘘ではありません・笑）

無事大学に合格することが出来まして、ホクホクしております。

そして、そんな復帰第一作目は、温めに温め、長くなった昨年書いた『約束』の続きです。

リアルタイムで時間を経過させてみました。これがしたかったんですっ！ので、お待たせいたしました；

きちんと『再会』できたお2人さん。よかったですねーと。

実は、快斗に名乗らせたことが無かったんですよ、今まで。初めてですよ。たくさん書いてきたのに（笑）

約3ヶ月のブランクは少々キツイですが、ご要望にお応えして、『キッドside』の続きも書きたいと思っております（何と、『キッドside』は半年ぶり…！）。

そして、今年は甘いものにも挑戦したいと思います。ほのぼのは書けるのに、ラブラブは書けないので；

あと、リクエストを受け付けることにしました。

ネタに困った時（結構あると思うんです；）、それを参考にさせてもらおうと思ひまして。

感想でも、メッセでも構いません。ぜひお送り下さい。お待ちします。

では！ 今後も精一杯頑張っていくので、突っ込み・ダメ出し・感想など下さい。

これからよろしく願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9939d/>

再会

2010年10月20日18時20分発行